

集 会 ア ピ ー ル

全国の労働者・学生・市民諸君！

朝鮮半島に高まる戦争の危険は、われわれがおかれている状況がきびしい歴史の危機にあることを示している。佐藤政府は、ベトナム侵略の泥沼にあえぐアメリカ帝国主義と共に、進んで戦争の危機をつくりだすことに狂奔している。十月八日の南ベトナム訪問から、十一月十二日の訪米、そして一月十九日のエンタープライズ艦隊寄港の強行とうちつつく攻撃は、日本のベトナム参戦国化と核武装の道をつつばしるものであった。七〇年安保改訂は、その総仕上げであり、ベトナムから朝鮮へ、全アジアに拡大する危機をはらむ戦争と反動の嵐に、日本人民を駆りたてるものである。

われわれは改めてこの危機と闘い抜く決意を固めねばならない。

全国の労働者・学生・市民諸君！

エンタープライズ阻止の佐世保闘争は、戦争と反動の危機に対する日本の労働者人民の鋭い反撃であつた。エンタープライズの巨体によつて日本人民を圧倒し、戦争と核武装に反対する根強い抵抗をうちくたさうとした佐藤政府と米帝の意図は挫折した。「核アレルギ」解消の狙いとは逆に、日本人民の反戦反核兵器の巨大なエネルギーが引出され、七〇年を迎える階級闘争に、進むべき方向を与えたのである。

この闘いを切拓いたものは、中核派を先頭とする全学連の現地実力闘争であつた。あらゆる弾圧に屈せず「第三の羽田」を実現した全学連の闘いは、労働者人民に、「闘える」自信を与え、いかなる闘いが勝利をかちとりうるかを万人に示した。この闘いは全国の労働者の魂をゆさぶり、新たな闘いの決意を固めさせたのである。佐世保市民をはじめ、圧倒的な大衆が、全学連を熱烈に支持し、連帯して立上つたのは、この闘いがうつろした人民の怒りの代弁者となつたからである。

全国の労働者・学生・市民諸君！

全学連の佐世保現地闘争は、マル学同中核派が、羽田以来三カ月にわたる、権力との血みどろの闘いによつてかちとつたものである。

十・八の「第一の羽田」以来、全学連の中心を担う中核派は、山崎同志の死とおびただしい負傷・逮捕に加えて、「暴徒」「挑発者」の非難をあび、十一・十二に「第二の羽田」を闘いとつた直後からは、破防法の攻撃にさらされてきた。

「第三の羽田」をめざす中核派に加えられた弾圧は、飯田橋での予防検束、博多駅での強制身体検査、佐世保でのガス水や特殊警棒の使用等々、法律すらふみにじるむきだしの警察国家の再来であつた。特に、十・八で山崎同志を「ひき殺した犯人」にデッチ上げるため、十九才の学生をいまだに獄中につないでいることは、許せぬ権力犯罪である。だが弁護団の力強い援助の下に、中核派はこうした攻撃にうちかつたのだ。

しかも全学連に敵対したのは、権力だけではなかつた。日本共産党が、学生を権力の手先とののしり、佐世保に棍棒・ルメットをもつて全学連排除にのりこんだ。だがこの犯罪行為は、労働者の強い非難をあび、佐世保市民の手で排除されたのである。

弾圧を一つはねのけて進む力が、一層広汎な人々の目を開き、闘う師結をかちとることが示されたのだ。

全国の労働者・学生・市民諸君！

エンタープライズ反対を叫ぶ政党が数多いなかで、ただ中核派だけが佐世保闘争をやりとげたのは、「参戦国化と核武装阻止」という基本方針の下に、エンタープライズ阻止を中心任務に設定したことと、その全力を「第三の羽田」めざして現地実力闘争に集中したことにあつた。そしてなによりもこの目的をかちとるため、すべてをやりとげる鉄の意志をもつた部隊を、しっかりと組織したことにある。形ばかりの方針、きまりきつた戦術、権力と対決せず、目的を貫く意志も力もない、これまでの革新勢力の行動に、これは鋭い対比をなすものであつた。日本労働者人民の、反戦反核兵器の広汎な意志をくみつくし、有効な闘いに組織するためには、中核派が切拓いたごとく、まず先頭に立つて闘い抜く部隊・真の前衛政党が必要なのである。「今こそ闘う労働者党を！」これこそ三つの羽田を闘い抜いたものの切実な教訓なのである。

全国の労働者・学生・市民諸君！

佐世保闘争で一時たじろいだ佐藤政府は、たちまち反動の姿勢を強め、エンタープライズの再寄港めざして反対運動の弾圧に全力をあげだした。だが佐世保闘争でもえ上つた闘いの息吹きは、これをうち返して巨大な七〇年闘争をつくりうる力を秘めている。佐世保基地を走つた中核旗の下に全学連の戦列をうちかため反戦青年委員会を先頭とする労働者階級の闘う力を拡大し、断固として七〇年への勝利をめざす戦列をうち固めつつバク進しようではないか。

一九六八年一月三十一日

全学連佐世保闘争報告大集会